

新文法 第23章 動詞(I) 時制とアスペクト・語彙 アスペクト・直説法の時制

山村, ひろみ
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/19925>

出版情報 : 『スペイン語記述文法』 『スペイン語新文法』 章別和文要約 . 5, pp.278-298, 2011-03.
関西スペイン語学会
バージョン :
権利関係 :



第 23 章 動詞 (I). 時制とアスペクト. 語彙アスペクト. 直説法の時制
El verbo (I). Tiempo y aspecto. El aspecto léxico. Los tiempos del modo indicativo,
Vol. 2, pp. 1673-1795

山村ひろみ (Hiromi YAMAMURA)

はじめに

ここでは「第 23 章 動詞(I). 時制とアスペクト. 語彙アスペクト. 直説法の時制」を扱う。以下、各節の要約をしていくが、その内容は、必要に応じてまとめた部分を除き、原則として原書に出現した順になっている。また、本章で用いられた各時制の名称については、次に示すように、スペイン語の名称、その日本語逐語訳およびスペイン語名称の略語を用いている。スペイン語の名称は後述するように、NGLE の時制に対する考え方が直接反映されたもので、形態的構造・時間的投錨・アスペクトの特徴からなる。

presente (CANTO): 現在, pres., pretérito perfecto compuesto (HE CANTADO): 複合完了過去, pc., pretérito perfecto simple (CANTÉ): 単純完了過去, ps., pretérito imperfecto (CANTABA): 未完了過去, imp., futuro simple(CANTARÉ): 単純未来, fut., condicional simple(CANTARÍA): 単純条件, cs., pretérito pluscuamperfecto(HABÍA CANTADO): 大過去, pcp., pretérito anterior(HUBE CANTADO): 前過去, pa., futuro compuesto(HABRÉ CANTADO): 複合未来, fc., condicional compuesto(HABRÍA CANTADO): 複合条件, cc.

また、原書の中の記述で「あるいは」とある場合には、その記述を括弧の中に入れ、分かりにくい日本語の用語には原書にあるスペイン語を括弧に入れ示した。なお、原書の本文中にはスペルミスが散見されたが、そのような場合にはその都度注で指摘した。

23.1 導入. 動詞時制の概念. 時制の分類

時制とは直示的なカテゴリーで、指示詞が話し手の遠近感をもとに人やモノを定位するのと同様に、発話時をもとに出来事¹を定位するものである。しかしながら、文法的時、つまり、動詞が示す時制は、単に話し手の発話時を基準にイベントを前時的、同時的、後時的と定位するだけでなく、発話時以外の出来事・時点を基にした複雑な時間関係を示すものでもある。

スペイン語の動詞時制は、形態的構造・時間的投錨(anclaje temporal)・アスペクト的特徴の 3 つの基準に従って分類される。このうち、形態的構造による分類は単純時制と複合時制の区分、時間的投錨による分類は絶対時制と相対時制による区分、そしてアスペクト

¹ 本章では、acontecimiento, suceso, evento が明確な定義なしに用いられている。本稿は、acontecimientos と suceso は「出来事」、また、evento は「イベント」と訳している。

的特徴による分類は完了時制と未完了時制による区分に相当する。

まず、単純時制と複合時制の区分については、複合時制を構成する“haber+過去分詞”は動詞屈折の一時制と見なす。なぜなら、その過去分詞は他のロマンス諸語の場合とは異なり無変化であり、この形式を迂言形式と見なし動詞活用から排除すると、それ自体迂言形式の中で孤立した群を形成し単純時制から不当に乖離することになるからである。

次に、絶対時制と相対時制の区分については、発話時基準の時制が絶対時制、それ以外の時点が基準になる時制を相対時制となるが、この区分は先述の単純時制と複合時制の分類に部分的にしか対応しない。例えば、imp.は単純時制であるが相対時制であり、pc.は複合時制であるが絶対時制である。伝統的研究の中には、絶対時制は相対時制として使用されることはあるがその逆はない、と主張するものがあるが、このような拡大解釈は問題である。そのようなことが認められるならば、En cuanto terminó la reunión, se levantaron todos の ps.の levantaron は terminó に対して後時的関係を示すことになるが、この後時的関係は en cuanto に因るものである。同様のことは絶対時制の fut.についても当てはまる。以上のことから、絶対時制が相対時制になることはない。

時制の名称は文法研究の中で変化してきた。p.1680 の表に出ている用語は唯一というわけではないが、もっとも流布しているものである。Bello の用語はそれ自体が定義となっており構成的である。例えば HABRÍA CANTADO の antepospretérito という名称は、それがある過去(pretérito)よりも後(pos)にある時よりも前(ante)にある時を表すことを示す。

一方、動詞時制は普通、発話時・参照時・イベントを定位するのに必要となる時点(イベント時)の3点を用いて分析される。しかし、どの時制を定義するにもこれら3点が必要なのかについては意見の一致がない。発話時はほとんど常にメッセージがコード化される状況に一致し時制の直示的性質を如実に示すものであるが、手紙やメモのように、発話時とメッセージのコード化の時が一致しないこともあるため、両者は区別する必要がある。参照時とは所与のイベントを時間軸上に定位するために関与するインターバルである。この参照時に関して前時性を示すのは cc., pc., pcp.であり、同時性を示すのは imp.,後時性を示すのは cs., cc.であるが、cc.は参照という観点からもっとも複雑な時制である。イベント時は瞬間のみならずインターバルも示し、インターバルの場合には、イベント時が定位される状況に応じた時間的断片となり、焦点時と呼ばれることもある。

時間軸上の一定の区分を共有する時制の集合は時制領域(esfera temporal)と呼ばれ、発話時を含む(あるいは含まない)インターバルから成る。スペイン語では現在領域と過去領域が区別され、現在領域には pres., fut., fc. が属し、それ以外の時制は、現在領域と過去領域の間で揺れる pc.を除き、すべて過去領域に属す。

23.2. 動詞アスペクト。その分類。

動詞アスペクトは、イベントの内的構造、すなわち、イベントが生起し、終了する、あるいは、繰り返される方法についての情報、また、そのイベントが全体として知覚される

か、その一部分だけが知覚されるかについての情報を与える。よって、アスペクトは直示的カテゴリーではない。動詞アスペクトは内的時制と呼ばれることもあった。実際、アスペクトは状況(situaciones)がその内的展開に従って表されることを可能にし、それらは瞬間的、終結的、未終結的あるいは反復的といった具合に提示される。

スペイン語に「アスペクト」が存在するか否かというのは、いまだ解決されない問題である。スペイン語に「アスペクト」は存在しないという立場は、スペイン語の「アスペクト」がもたらすと思われる情報は時制的内容から推論できると理解しており、一方、スペイン語には「アスペクト」が存在するという立場は、スペイン語の時制体系はそのアスペクト体系と交差しており、アスペクト体系は文法的実現の如何に関わらず非常に多くの種類に細分化されていると考えている。形式的観点から見ると、動詞アスペクトは、1. 語彙アスペクト(動作様態)、2. 統語(迂言)的アスペクト、3. 形態(屈折)的アスペクトの3つのグループに分けられる。

語彙アスペクト(動作様態、動作の性質、動作性とも呼ばれる)とは、*Llegó a la ciudad* と *Vivió en la ciudad* の間に見られる語彙的対立のことで、事態²の自然な(固有の)終点(限界点)の有無に関係する。一方、統語的(迂言)アスペクトとは助動詞的な動詞と主動詞から成るいわゆる動詞迂言形式のことで、*ir a +infinitivo*(以下、*inf.*)のように時制的内容、*empezar a+inf.*, *estar+ger.*のように事態の局面、*volver a+inf.*, *soler+inf.*のように事態の「反復」「頻度」等を表わす。最後の形態的(屈折)アスペクトとは、伝統的に「完了時制」と「未完了時制」の区別に利用されてきたものである。この観点によれば、*imp.*は「未完了」な動詞形式で、当該行為を開始点また終結点に言及することなく提示し、一方、*ps.*は「完了」的動詞形式で状況を全体として焦点化し、当該事態がその終点に到達したことを表す。スペイン語の時制のうち「未完了」は *imp.*, *pres.*, 「完了」は *ps.*, *pcp*, *fc.*である。*fut.*, *cs.*はアスペクトに関して「中立」であり、*pc.*のそれは諸文法要素また地理的バリエーションに左右される。「完了アスペクト」「未完了アスペクト」と同様に、事前の過程の結果状態を示す「パーフェクト・アスペクト」が区別されることもあるが、同アスペクトは「完了アスペクト」のバリエーションとする立場もあり、その価値がアスペクトなのか時制なのかについてはまだ一致した見解がない。

語彙アスペクト、迂言アスペクト、形態アスペクトという「アスペクト」概念の3つのタイプは共通点はあるものの違いの方が大きい。例えば、*esperar* のように語彙アスペクトの観点から「継続的」と見なされる述語はその時間的広がりから形態的アスペクトの「未完了アスペクト」と類似しているように見える。しかし、この継続的述語は未完了・完了

² 原書では “es relativa a la existencia de FINAL o de LÍMITE natural o intrínseco de las acciones y los procesos” となっている。本稿では、この例文にある *acciones*, *procesos* や、後述される「状態」「活動」「到達」「達成」といった述語のカバー・タームとして「事態」を用いる。なお、原書の中では “situaciones” “hechos” “estados de cosas” といった語がカバー・タームとして用いられているように思われるが、各語の定義は提示されていない。

両方の時制で表され、その意味はそれぞれ異なる。同様に、ある述語の限界性の有無を判断する統語テストも、その時制のアスペクトに関わらず同じように適用される。この「限界(límite)」という語彙的概念とその形態アスペクトを通した表現の間の違いは、*ps.*が非限界的述語を拒否しないということでも確認される。このように述語の語彙的限界性というのは、その意味によって決定されたもので「内的」なものである。そういう意味で *vivir en Caracas* は内的限界点を持たないので非限界的、一方、*viajar a Caracas* は内的限界点を持つので限界的となる。しかし、*vivir en Caracas* のように非限界的状況も際限なく続くことはない。つまり、非限界的状況もそれが占めた時間的範囲(*extensión temporal*)によって「外的」に限界づけられる。この時間的範囲は統語的手段によって表されるのが常である。以上をまとめると、文法的観点からすると、特定のアスペクト概念が表示される(動詞語幹、迂言形式、屈折、複合時制等の)形式の方が、ただその意味に注目した特徴付けよりも重要であると結論づけられる。

23.3 語彙アスペクトあるいは動作様態 I 状況と属性の種類

語彙アスペクトは(動詞だけではない)述語の特徴であり、この特徴は述語の意味だけでなく、その直近の統語的文脈からも得られる。これまでその語彙アスペクトに注目しながら様々な述語の分類が提案されてきたが、近年は「活動・実現・達成・状態」の4分類が主流であり、本書もこの4分類を採用する。当該4分類は辞書に登録された語彙的単位と動詞句の2つの単位を含むが、特に動詞句は語彙アスペクトの最も重要な特徴である構造的性質の基となるものである。以下、4分類ごとの特徴を述べる。

語彙アスペクトにおける「活動(*actividades*)」とは、推移(*curso*)または展開(*desarrollo*)に従う状況のことで、その基本的特徴は限界点を必要としないこと(「非限界性」)にある。

「活動」類述語の統語的特徴は次のとおりである。「活動」類はその「継続性」という特徴から、<*durante*~*por*+時間的数量句>とは共起できるが、時間的限界を示す「*en*+時間的補語」とは共起しない。また、「活動」類述語は *terminar de* +*inf.*より *dejar (cesar, parar) de* +*inf.*と共起し、さらに<*llevar*+現在分詞+時の量的名詞句>による構造化も可能である。

「実現(*realizaciones*)」類述語は「活動」類述語の「継続性」に加えて「限界性」を有し<*en*+時間補語>と共起する。また、「実現」の述語は「限界」的であることから *terminar de* +*inf.*を容易に認め、*durante(por)*に導かれた時の補語と共起すると「結果状態」の解釈を生むことになる。さらに、「実現」の述語の多くは補語の示す実体に何らかの効果を引き起こすような行為を表し、当該実体の存在あるいは消滅を生むことさえある。

「達成(*consecuciones o logros*)」類述語は時間的限界点を持つという点で「実現」と類似するが「継続性」を欠くという点でそれとは異なっている。このことは「達成」類述語が<*en*+時間補語>と共起すると、*Murió en unas pocas semanas(después de transcurridas uans pocas semanas)*が示すように、その時間的補語が当該事態が成立するまでの時間的局面を示すことに明らかである。その結果、「達成」類述語は瞬間的な事態を示すと解釈さ

れることになる。また、「達成」類述語は<estar+現在分詞>によって表されると、当該事態の反復あるいは周期的な解釈を生みがちである。さらに、「達成」類述語も *durante* と *por* に導かれた時の補語と共起すると「結果状態」という解釈になる。

「状態」類述語はその「非動態性」によって特徴づけられるものである。この「動態性(dinamismo)」という概念は上記の「限界性」「継続性」に比べて議論の多いものであるが、今日では「状態」述語をその他の類の述語と区別されるために導入されたと考えられている。本書が用いている「状態」という概念は広いもので「属性(propiedades)」をも含んでいる。実際、「属性」というのは *estar enfermo* のように「一時的な状態」に対立する *ser australiano, deribar del francés antiguo* のような「永続的な状態」と捉えられるのが普通である。

以上の4分類を関与的な特徴の有無に従ってまとめると、「活動」：＋継続性，－限界性，＋動態性，「実現」：＋継続性，＋限界性，＋動態性，達成：－継続性，＋限界性，＋動態性，状態：＋継続性，－限界性，－動態性，となる。

23.4 語彙アспектあるいは動作様態(II) その構成的性質

語彙アспектは、動詞述語の不定詞の意味だけでなく、文の様々な構成素が一緒になって示されるという意味において、構成的に決定されるものである。*Cortés escribió la carta* はある終結した行為に言及しているが、[...] *escribió cartas* は *escribir algo* に内在的な限界を欠いた状況を示している。このように、動詞 *escribir* の意味は、*escribir* がその一部となっている動詞述語の語彙アспектに干渉する諸要素の一部に過ぎない。

「実現」の動詞は「限界(終結)」を有す行為を示すが、内在的に「実現」と特徴づけられた動詞は存在しない。「限界」というのは(*escribir la carta* のように)特定化されていたり、(*escribir tres cartas* のように)数量化された補語によってもたらされるからである。つまり、限定詞と数量詞が限界的働きを果たすわけである。

一方、非限界的状況が *Mario se dedica ahora a escribir novelas* のようにある指示対象を特徴づける属性を表す場合、出現した複数形(*novelas*)は一連の推論されたイベントから生じたものであり、総称的(*genéricas*)と言われるこのような状況の特徴となっている。

限定詞なしの単数で用いられた非可算名詞は限定詞を欠いた複数名詞と非常に多くの接点があり語彙的手段で「複数性(pluralidad)」を表す。そういうことで、語彙アспектという観点から *comer pan~comer un pan* は *escribir cartas~escribir la carta* に類似している。また、非可算名詞の「複数性(多数性)」という語彙的特徴は、アспектの「継続」という特徴に転換される。例えば、*Todo se interrumpe cuando empieza a llegar gente* の *llegar gente* とは対照的に **...cuando empieza a llegar Juan* とは言わないが、これはアспектの「継続」特徴として再解釈される「多数性」という特徴をもたらしめているのが非可算名詞の *gente* であるからである。

他動詞の直接目的語が特定解釈の定名詞句か否かは、「活動」述語を「実現」述語と解

積する際に関与する要因である。しかし、この再カテゴリー化は単に名詞句から生じるのではなく述語の意味からも生じる。例えば、*ver la televisión* は特定の直接補語を持っているが「活動」であり、一方、*limpiar la televisión* は「実現」で限定的行為を示す。

特定化あるいは数量化された名詞補語は当該事態の終わりに影響を被る要素を示すことができるが、それは *Leyó su novela durante un rato* のように「実現」述語が「活動」述語に変わることを妨げるものではない。逆に、「活動」が「実現」に変わる時、特定化あるいは数量化された名詞句は、*nadar durante horas~nadar tres millas(*durante horas)* のペアが示すように、イベントの限定的特徴の決定的要因になる。

非限界的述語が *Durmió hasta el amanecer* のように前置詞 *hasta* に導かれた限定補語を受け入れるというのは逆説的であるが、このような時の補語はイベントの自然な頂点とは独立した限界を表示している。つまり、*hasta el amanecer* は眠りという行為が中断する時点を示しているのであり、必ずしも眠りが終了する時点を示しているのではない。一方、前置詞 *hasta* によって導入された空間補語はイベントを限定し、「活動」述語を「実現」の述語に移行する。「達成」の述語も空間または時間の限定補語を認めるが、時間的補語が *El tren llegará a esta estación hasta el 30 de mayo* のように時間的広がりや欠く対象に用いられると、反復的解釈を生む。なお、メキシコ、中米、エクアドル、ボリビア等では、*El tren no llegó hasta las cuatro* という意味の *El tren llegó hasta las cuatro* という文が確認されている。

いわゆるアスペクトの *se* は限界的性質を持つ述語のいくつかに影響を与え、例えば、*El director se leyó los informes económicos* のような文の定冠詞は省略されない。このアスペクトの *se* と文法項ではない与格の境界はあいまいであるが、限界的性の必要条件が得られたときのみ、*comer(se)*、*gastar(se)* のような「消費」を表す動詞や *aprenderse algo de memoria* のように自分のために実行された行為を表す動詞と共起する。また、*irse*、*marcharse* のような移動の再帰動詞はその起点を示唆し「達成」述語と解釈される。

23.5 現在 (CANTO) (I) 直示的特徴. 一般化現在(presentes generalizadores)

現在(以下, *pres.*) は、当該の出来事が生起する瞬間に発せられた *El delantero sale al terreno de juego* のように、発話行為(*acto verbal*)と状況の一致を表す。しかし、この(*presente puntual, presente actual o momentáneo* と呼ばれる)*pres.*の厳密な解釈はあまり一般的ではない。それは、発話行為時(*punto de la enunciación*)は厳密な意味で一瞬であるが、*pres.*で表される事態は瞬間的である必要はないからである。瞬間的現在には、*Te lo prometo* が独立した発話として用いられると「約束」になるように、実行的な動詞に発語内の力(*fuerza ilocutiva*)を与える用法もある。

*pres.*は *El músculo necesita que la insulina facilite el transporte de la glucosa* のように、プロトタイプ的に人やモノの属性あるいはそれに特徴的な状態を表すこともできる。この用法は「総称的(一般化)*pres.(presente genérico o generalizador)*」と呼ばれるが、こ

の **pres.**は間接的にしか直示的ではなく、それが完全に時間的投錨を欠いたものなのか、発話時を含むその境界が漠然とした継続的状況に投錨されたものなのかについては統一の見解がない。一方、*Pero claro, él necesita justificar con este asunto de la madre* における **pres.**は特定の状況に限定された状態を示しその直示的性質は明瞭であるが、当該状態は正確に発話時と一致しているわけではない。このような **pres.**の用法は「継続的(アクチュアル, 拡大)**pres.**」と呼ばれ、非限界的述語に特徴的である。

点的現在と継続的現在の間に位置するのが「進行的 **pres.**」と呼ばれるもので、発話時に進行中のいろいろな状況を示す。この **pres.**では<estar+現在分詞>との交替が起こる。「状態」述語は動態的ではないので「推移」に従った状況は示さないが、その中にも *Estás teniendo mucha suerte* のように<estar+現在分詞>の迂言形式を認めるものがある。一方、**pres.**と迂言形式の等価性は、*Te {espero~estoy esperando} desde las once* のように、その起点が特定されたものであれば非限界的述語でも起こりやすい。

以上、**pres.**は時の線上の一点、また、何らかの広がりを持つ同線上に投錨されること、また、総称的現在の解釈で見たように、同線上のどこにも投錨されないことも可能であることを見た。これら **pres.**の様々な用法はその意味的価値から「総称的(一般化)**pres.**」とまとめることができる。この「総称的(一般化)**pres.**」には、反復された状況に言及する「習慣(周期)的 **pres.**」、*Caracas es la capital de Venezuela* のように指示対象の属性を示す「特徴付け(記述的)**pres.**」、非時間的(atemporales)あるいは普遍的真実を示す「格言的 **pres.**」、*Las plantas no se riegan cuando les da el sol* のような「規範的発話(enunciados normativos)」の用法も含まれる。このような「総称的 **pres.**」に共通の特徴は、それが過去の動詞と共に名詞従属文あるいは関係詞文に出現すると「時間的ダブル・アクセス」の読みになる点である。また、**pres.**と **imp.**は同じ未完了の時制であることから、本章で検討された **pres.**の総称的用法のほとんどは **imp.**にもあてはまる。

23.6 現在(CANTO) (II) 回顧的な現在と未来の現在. その他の現在の用法

発話時を過去の一点に転移する **pres.**は「歴史的現在」と呼ばれ、伝記や歴史的記述に特徴的である。歴史的現在の研究は、発話時からの転移は **pres.**に依存した時制の方向性の再決定を行うと指摘してきたが、これは **pres.**が過去の方に転移すると、その他の時制も **pres.**と一緒に転移することを指す。この時の方向の再決定(再方向づけ)は会話中の「歴史的現在」では変質し、*Cuando su madre muere, él tenía cinco años.*のように **tiene**の代わりに **tenía** が用いられることが多い。

新聞の見出しや写真のキャプションでも同様に過去の事実が **pres.**で記述されるが、これはそれが編集者にとっての現在の事実を示しているからである。このような(表現された事実の現在と呼ばれる)**pres.**の用法と歴史的現在の間には違いがあり、前者は、後者とは異なり、直示的中心が過去に遡ることはない。また、この用法は「分析的 **pres.**」と呼ばれる用法に非常に近いが、その分析的現在は、確実だと信じられている言明を表すという

点で、先に見た「総称的(一般化)pres.」と関係している。

発話時に近い過去のある時点に起こった事実、またその出来事の結果に言及する pres. は「直近の出来事(直前過去)の pres.」と呼ばれ、メッセージ、ニュース、様々な文書で出現する。当該媒体においてこの pres.の用法が頻出するのは、それらでは伝達内容のデコード化の時点が優先されるからである。

局面副詞 todavía を伴った否定文は El tren no {llega~llegó~ha llegado} todavía のように、pres.と過去とりわけ直近の過去との中和化を促し、この文が電車を待っている間に発話されるのであれば、当該3時制はほとんど同じ意味を表すことになる。しかし、この文脈では、ラ・プラタ川流域、アンデス山脈、チリおよび中米のスペイン語では pres.が、ヨーロッパのスペイン語またいくつかのアメリカの国々では pc.か ps.が選択される。このような pres.と過去との中和化は語彙的要因に左右されることもある。Te traigo los bombones における traigo はアメリカのほとんどでは traje, アンデス山脈とイベリア半島のスペイン語の大部分では he traído と交替するが、Te doy este libro の doy は di と he dado とともに交替することができないからである。

他の過去時制と共に生起しながら語りに生彩を与えるという「語りの pres.」は当該談話に導入された出来事の連続を絶つという点で「歴史的現在」とは異なる。この語りの断絶は he(te) aquí+pres.; de pronto+pres.のような構文とともに起こることが多いが、por poco, a poco, casi といった副詞も同様の解釈を生む。

「未来の pres.」は発話時以降の出来事を示すが、この用法には発話時以降を示す補語が必要である。この「未来の pres.」は fut.と同じく「脅し」を示すだけでなく「命令・指示・示唆・要求」を表す文としても解釈される。同様に、条件文の前件に出現する pres.も未来を志向したものである。この pres.の未来用法は語彙アスペクトによって制約を受け、「状態」述語は当該文脈でも非未来的状況を示すことがある。

23.7 複合完了過去 (HE CANTADO)(I). 過去の事実の現在における関連性(relevancia)

pc.は過去の事実が現在にまで持続していることを表すが、一方、ps.は発話時以前に定位されてはいるが発話時とは関係づけられない事実を示す³。この pc.の価値はヨーロッパのスペイン語の中央と南部でははっきりと確認されるが、その他の地域では消滅あるいは新たなニュアンスを獲得する傾向にあり、pc.はその用法の地理的バリエーションが非常に大きい。また、前述の ps.と pc.の対立も、メキシコ、中央アメリカ諸国、カリブ海地域では時制的というよりむしろアスペクト的であり、ps.が過去に終了した行為を示すのに対し、pc.は現在においても継続している行為を示すために使われる。一方、チリやアルゼンチンの大部分、スペインの北西およびカナリアス諸島では ps.と pc.の対立は中和され ps.が使

³ p.1721, 23.7a の 9 行目にある ps.の説明では la forma CANTÉ denota hechos anteriores al momento del habla, pero relacionados con él とあるが、“relacionados”は“no relacionados”の間違いだと思われる。

われるのに対し、ペルーの海岸部およびボリビアのアンデス地域では pc.が ps.に取って代わるという逆方向の中和が起こっている。

pc.には基本的に 2 つの価値が区別される。一つは「前現在(antepresente)解釈」と呼ばれるもので、発話時以前の状況が発話時から評価されることを示す。この解釈は例えば *Ha sufrido mucho en la vida* において得られるもので、すべてのスペイン語話者にとって共通なものである。もう一つの「完了(アオリスト)解釈」は *Ha llegado hace dos meses* のように ps.に相当する pc.のことで、ボリビアやその他の地域のスペイン語の特徴となっている。本書は pc.の名称として伝統的な「複合完了過去」を採用するが、pc.に「過去」や「完了」という概念のすべてが対応すると考えているわけではない。実際、pc.は以下に述べるように、pres.と密接な関係を持つ。

pc.と pres.の関係は、pc.の意味にも、また、それが出現する統語的文脈にも確認される。例えば、pc.の haber の pres.は *En este siglo la ciencia ha experimentado grandes avances* におけるように、指示詞 *este* と同じ直示的特徴を持っている。このような pc.の助動詞の時制と指示詞等の間にある直示的特徴の共有は、pc.がその意味特徴において pres.と類似することを統語的に示すものである。

pres.の特徴である存在的前提(presuposición existencial)も pc.に共有されたものである。*Arturo ha estado tres veces en Buenos Aires durante este año* では *Arturo es médico* と同じく *Arturo* が生きていることが含意されるが、この含意は「存在的前提」と呼ばれ、ps.の文では得られないものである。また、pc.が、*Mañana a estas horas, seguro que ya hemos terminado el informe* のように、未来に言及する時の補語とともに未来の結果解釈を認めるという点も pres.と類似するところである。

Arturo ha estado tres veces en Santiago en el último año のようにある出来事が一度あるいはそれ以上の回数起こったことを示す pc.は「経験の完了」と呼ばれる。pc.が「経験の完了」と解釈されるかどうかの基準としては *alguna vez* のような不定の頻度を表す表現との共起の有無がある⁴。一方、非限界的述語によって表現された状況が現在も終了していないという文脈で使われる pc.は「継続的 pc.」と呼ばれ、当該状況の継続期間を示す *durante* 等を伴った補語と出現する。

pc.の表す当該状況が発話時以降に継続するか否かには地理的バリエーションがある。*He trabajado veinte años para él* は *Sigo trabajando para él*(継続的前現在)あるいは *Ya no trabajo para él*(非継続的前現在)の解釈を生むが、ヨーロッパのスペイン語、アンティールヤス諸島、アンデス地域そしてアルゼンチンの北西部のスペイン語では、これらの 2 つの解釈の両方が認められ、残りのアメリカ地域では継続的解釈の方が明らかに優先される。このような pc.の示す発話時における継続状況は *HE CANTADO* という形式に与えられた *pretérito perfecto compuesto* の *perfecto* に矛盾するものである。とはいえ、pc.は「前現

⁴ このことから、「経験の完了」は「不定完了(perfecto indefinido)」と呼ばれることもあったが現在は使われていない、と原書では指摘されている。

在」という価値において、その開始点が過去にあり、その終結点が発話時にあるような状況に適用されるという共通点を持つ。この開始点から終結点までのインターバルは「拡大された現在」と呼ばれるものである。この pc.が示す状況は発話時以降継続することもあるが、その期間に発話時が含まれるということは明らかである。

23.8 複合完了過去(HE CANTADO)(II). 直近の事実の完了. その他の用法

La he visto hace un momento という文を自然とする地域と不自然とする地域がある。不自然とする地域では he visto の代わりに ps.の vi が用いられる。pc.のこの用法も発話時を含む時間領域に定位された事態に対応することから「直近の出来事(直近過去)の完了過去」と呼ばれる。この用法で重要なのは、当該状況が対応する期間が発話時(今日、今週、今月、今年等)には終了していないということである。例えば、La sesión ha empezado a las ocho における a las ocho は発話当日の 8 時であり、Me ha llamado hace unas horas の hace unas horas も発話当日内の時間を指す。ヨーロッパのスペイン語話者の中には、[...] ha fallecido la pasada madrugada という pc.文を認める者がいる。一日の範囲ははっきりしないことがあるが pc.の当該用法を説明するためには意味がある。というのも、前述の文を認めたヨーロッパのスペイン語話者も自由自在に現在を過去に延長することはできず、la pasada madrugada を la pasada semana に変えた pc.文は非文になるからである。

Arturo ha llegado hoy のような文は中南米のスペイン語の多くの部分では認められていないが、この hoy が過去の出来事の評価時と解釈されるときには自然となる。どのスペイン語話者にとっても自然な Una fotografía tomada antes de [...] registra unos cachetes redondos y saludables que hoy han desaparecido という文の hoy は「今日(きょう)」ではなく、「現在」「今日(こんにち)」を意味している。したがって、この pc.は先に見た「前現在」の用法である。

以上の pc.の「直近過去」の用法は、ヨーロッパのスペイン語、ペルー海岸部、ボリビアのアンデス地域、コロンビアおよびアルゼンチンの北西部等で確認されるが、その他の地域でもこのプロセスは可能である。ただ、それらの地域では、文脈や発話状況が、発話時から見て関与的と評価される事態を提供する必要がある。前節で見た「経験」という概念はそのような文脈となる。つまり、マドリードやリマで「今日(きょう)」を連想させる He comido con Luis という文は、メキシコやモンテビデオでは He comido con Luis; no me tienes(o tenés) que explicar qué clase de persona es のように「経験的事実」を連想させるものになるのである。

ジャーナリスティックなテキストでは、当該事件に対する最初のコメントがしばしば pc.によって提示されるが、そのような pc.は「ホットニュースの完了」と呼ばれている。ニュースの内容は ps.で展開されるのに、冒頭のコメントが pc.なのは、それが発話時と結び付いているからである。

一方、それが示す事態の結果状態がアクチュアルと推論させる pc.は「結果完了」と呼

ばれ、少なくとも 2 つの解釈がある。一つは *El niño ha roto el jarrón>El jarrón está roto* のように、結果状態の存在(不在)を表わすために *estar* による言い換えが可能なもので、もう一つはそのような *estar* による言い換えが必ずしも起こらないものである。

「結果完了」の構文はスペイン語では一般的なものである。したがって、この用法は「直近過去」の *pc.*が使われない地域でも見られる。この「結果完了」は「エビデンシャル(確認された事実)の完了」とも呼ばれているが、上で見た「ホットニュースの完了」に近いものである。プエルト・リコ、ニカラグア、コスタ・リカおよびその他の中米諸国、アンティールヤス諸島ではこの用法が非常に多くの文脈に広がっている。「エビデンシャルの完了」には、歴史的現在や過去形に後続するものもあるが、これらは「語り」の価値を持つという点で前に見た用法とは根本的に異なる。

「エビデンシャルの完了」には非結果的用法もある。エクアドルの話者が何かの値段を尋ねた後に *Ha sido caro* と言うとき、それは話者が当該の情報を入手したばかりであること、また、その情報が話者にとって新しい、驚くべきものであることを示している。つまり、この *pc.*はある情報の獲得が話者に引き起こした結果の状態を表しているのである。なお、この「非結果的エビデンシャル」の用法はエクアドルのケチュア語の翻訳借用(*calco*)の可能性がある。

以上、23.7, 23.8 で扱われた *pc.*の用法をまとめると、「経験用法」「継続用法」「＜否定＋瞬間述語＞の継続用法」「当日に限定された直近用法」「アクチュアルのように提示されているが現在との結びつきははっきりしない用法」「語りのエビデンシャル」「結果的エビデンシャル」「非結果的エビデンシャル」「完了(アオリスト)用法」となるが、これらの地理的分布の実態は大変複雑で p.1735 の表に示されたものはその概括に過ぎない。

23.9 単純完了過去 (CANTÉ)

*ps.*は *pc.*と「完了性」を共有している。したがって、*ps.*は語彙アスペクトの「達成」「実現」といった限界的述語と共起することが期待されるが、実際には、限界的述語と同様に「活動」「状態」といった非限界的述語とも共起する。これは 23.2 で見た述語の外的限界と内的限定の相違から推論されることである。

Llegué, vi y vencí のような *ps.*の連続はしばしばアイコン的性質を提示すると指摘されてきたが、それはこの *ps.*が連続するイベントの生起する順序を示しているからである。このとき「等位(y)」は事態の因果的結びつきを示す。

*ps.*の「実現」類述語と共起した時の付加詞は当該事態の起動的解釈を導き、*Escribió la carta a las ocho* の *a las ocho* は誰かがある手紙を書き始めた瞬間を示す。一方、*Escribió la carta el mes pasado* の *el mes pasado* は、その中で当該行為が生起したインターバルを示している。この *ps.*の起動相的解釈は、*Lavé los platos después de comer* のように短いインターバルを示す述語、*toser, saltar* のような *semelfactivo* な述語の特徴である。

多くの国の口語では限界的述語の *ps.*が「前もっての解釈(*interpretación anticipativa*)」

で用いられる。これは、当該事態の生起が差し迫っていると、何かをつかむ前に *Ya lo agarraron* と言ってしまうような用法で、*¡Ya está, nos fuimos! –dijo el viejo* もその例である。

ps.は反復を示す補語と共起はできるが、semelfactivo な述語を除き、それ自身で反復行為を示すことはなく、それが ps.と imp.を区別している。また、頻度の補語は特定のインターバルの中で当該事態が生起する割合を示すが、ps.と共起することはまれである。

永続的な「状態」の非限界的述語のほとんどは ps.を拒み、*Clara {fue~era} de extracción humilde* では era, *El letrado lo {dijo~decía} bien claro* では decía が優先される。これは当該述語が外的限定を欠いた人やモノの安定した特徴を示すことに因る。しかし、この永続的「状態」述語が語用論的要因により一時的「状態」述語と再解釈された場合には、ps.による表現も可能になる。

永続的な「状態」述語は「存在限定(delimitación existencial)」という方法でも限定される。「存在限定」とは主語の存在の限界、つまり、主語が人・動物・植物の場合、その生の限界によって示されるものである。例えば、*Su abuelo fue marino* は当該人物が水夫以外の別の職に移ったという解釈の他に、亡くなった当該人物が水夫だったという解釈も可能である。このような「存在限定」による ps.の出現はコピュラ文、とりわけ親類縁者、職業およびその他の個人を特徴づける素性を示す名詞において一般的である。

動詞述語は主語の性質とその出現環境に従って「存在限定」を認めることもあれば認めないこともある。例えば、*Luis fue muy duro* における *ser duro* は Luis の一時的な振る舞いを示唆することから「存在限定」という解釈は得にくい。が、*El invierno de 1945 fue muy duro* は客観的な時間的範囲を持つ冬の特徴に言及したもので「存在限定」が認められる。

pc.と ps.の分布は先に見た p.1735 の表の分布とは一致しない。実際、アメリカの大部分では、「経験の完了」また「エビデンシャルの完了」で ps.と pc.の両方の形式が認められる。とはいえ、それらの地域の pc.と ps.の意味が同じというわけではない。pc.は生起した状況を発話時を含むインターバルの一部として示すのに対し、ps.はそれを単に生起した状況としてしか示さないからである。つまり、*Ha sido mi amigo durante muchos años* は、いくつかの国では *sigue siéndolo* と解釈されうるが、*Fue mi amigo durante años* はすべてのスペイン語話者にとって *ya no lo es* を含意するということである。

23.10 未完了過去 (CANTABA) (I) 直示的信息とアスペクト情報

imp.を特徴づける基本的特徴は2つある。その最初の特徴は、「進行中(推移中)」の状況を示す、すなわち、状況の開始にも終結にも言及することなしにその内的進展に焦点を当てる時制ということである。そして、二番目の特徴は、直示的(指示的)あるいは照応的性質のもので、imp.の示す時間的外延がそれ以外の過去の状況に結び付けられることを示す。この「それ以外の過去の状況」は imp.以外の過去の時制、また時の付加詞によって表され

る。Bello の copretérito という用語はこの解釈を正確に取り入れたものである。

上記の imp. の 2 つの特徴の文法的役割をめぐっては、意見の一致が見られない。この議論の多い問題に関しては、少なくとも次の 3 つの態度がある。A. imp. は「過去」という時制的特徴と「未完了」アスペクトという特徴を有する。imp. を特徴づけるためには、これらの特徴で十分であり、copretérito という伝統的概念は不要である。B. その時制的特徴が相対(副次的)時制と解釈されるならば、すなわち、imp. を copretérito とする伝統的分析が採択されるならば、imp. のアスペクト特徴は不要である。C. imp. を相対(副次的)時制とする分析は「未完了」アスペクトと共存可能であり、imp. の特徴づけには「未完了」と copretérito の両方の特徴が関与し必要である。B と C によれば、imp. は ps. とは異なり発話時から直接的に測れない過去の状況を示すということになる。本書はこのような議論の多い問題に対して、慎重に、C の選択肢がもっとも適切であることを示す。

imp. の分析でしばしば指摘される「推移中の状況」「その内的展開中のイベント」という概念はあらゆる場合に有効なわけではないではない。なぜなら、Luis era albañil; El cuadro costaba mil dólares のように、述語の中には「推移中」や「内的展開」といったものに従わないものがあるからである。また、「達成」類の述語が imp. で用いられると、内的継続は示されず、Todos los días se acostaba temprano のように習慣的(反復的)解釈を受けたり、瞬間的な出来事が生じたことを示す「語り」の解釈になることがある。

一方、二番目の特徴にも問題がある。imp. を相対時制と解釈することは、それが「指示的に他の過去に依存している」という意味での「照応的性質」を認めることに等しいが、この imp. が結び付けられるべき過去の参照時がいかに獲得されるのかという問題がしばしば保留にされているからである。例えば、テキストの冒頭に出現する imp. の参照時はどのように確保されるのか。特に、この imp. が結び付けられる時の先行詞の決定は、ある個人の本来的な属性が示されるときに問題になる。copretérito という解釈が imp. のすべての用法に適用されると考えると、A Luisa le presentaron dos muchachos; uno de ellos era rubio, y el otro, moreno において uno de ellos era rubio cuando se lo presentaron といった誤った推論が導かれることになるからである。

また、imp. は統語的に隣接した過去を常にその過去を投錨時点にするとは限らない。例えば、Mencionaron que a Luisa le gustaban los camarones における imp. が mencionaron をその投錨時としているか否かは明らかではない。同文は gustarle a Luisa los camarones という状況がある人たちが何らかのコメントをするときに起こることを示してはいないからである。

しかしながら、以上の観察は imp. の相対時制としての価値を無効にするものではない。imp. は ps. の影響を受けたときに形式的に過去の形で出現する pres. として記述されている。この観点からすれば imp. は「過去の現在」ということになる。この分析の方向性は正しいが、imp. は「過去における現在」というよりはむしろ「過去と共存する現在」を示していると言った方がよい。

先に見た *copretérito* の分析の不備は直接話法と間接話法の関係によって回避することができる⁵。直接話法の *Mencionaron lo siguiente*: “A Luisa le gustan los camarones”は、*Mencionaron que a Luisa le {gustan~gustaban} los camarones* の2つの間接話法に対応する。従属動詞が *pres.*の場合は従属節の内容が発話時においても有効であることを含意するが、*imp.*の場合、その有効性はその言及時に限定される。なお、従属動詞が *imp.*の場合には、対応する直接話法が “A Luisa le gustaban los camarones”となることもあるが、この *imp.*の投錨時点は言外にある。

23.11 未完了過去 (CANTABA) (II) *copretérito* という概念の応用. 未完了過去の法的価値.

*imp.*を *copretérito* とする分析には様々な展開(*desarrollos*)があり、いろいろな理論的モデルが提案されているが、それらは、*imp.*は当該イベントが定位されるべき発話時以前の「領域(枠) *dominio(marco)*」を必要とする、という点で共通している。そのような環境は「過去の状況」「ステージ(*escenario*)」「パラレル・メンタル・スペース」「非アクチュアル面(*plano inactual*)」と呼ばれている。つまり、これらの分析によれば、*imp.*は何らかの過去の状況が話者によって想起されていないからではない。

*imp.*によって想起される「枠(ステージ)」という概念は、過去だけではなく非現実な状況をも包括するために拡大すべきだと提案されている。そうすれば *imp.*の「法的用法」の多くが説明できるようになるからである。そのような用法としては、*En mi sueño usted me soplabá lo que tenía que dictarles a los alumnos* のような「夢(空想)の *imp.*」や子供たちが遊びで用いる「遊びの *imp.*」がある。「遊びの *imp.*」については、非現実的な状況を導入するという点から法的価値を持つとする解釈と上記の「枠(ステージ)」を含む広い意味で *copretérito* という概念の拡張とする2つの解釈があるが、いずれにしても同用法がアクチュアルな状況から隔たっているとする点では共通している。この「隔たり(*alejamiento*)」は *Yo venía a pedirle un favor* のような「丁寧の *imp.*」の特徴でもあるが、特に、願望を表す「丁寧の *imp.*」は単純条件(*condicional simple* 以下, *cs.*)と交替する。

「引用の *imp.*」と呼ばれる *imp.*も *copretérito* の応用が可能である⁶。この *imp.*の用法は未来に言及する過去と密接な関係を持っており、*Mi avión {salía~saldría} mañana.* のような例から、*cs.*と *imp.*が同一視されることもある。このとき、未来の事を示すために *imp.*は用いられても *ps.*が用いられることはないという点は重要である。一方、この *imp.*は「未来の *pres.*」がある過去の「枠(ステージ)」から解釈されたものとも考えられる。

予見(計画)された出来事を表す *imp.*は「前望的(*prospectivo*)」と見なされているが、予見された出来事は発話時以後だけでなく発話時以前の可能性もある。この点においても

⁵ p.1747, 23.10j の3行目にある *discurso directo* は *discurso indirecto*, 12行目の *estilo indirecto* は *estilo directo* の間違い、また、同ページ、23.10k の7行目の *contaba* は *estaba*, 10行目の *permitan* は *permiten* の間違いだと思われる。

⁶ p.1751, 23.11i, 3行目の *discurso directo* は *discurso indirecto* の間違いだと思われる。

imp.と cs.は近いが、両者は唯一の単純相対時制という特徴を共有している。cs.は「過去の未来」、imp.は「過去の現在」と見なされるが、ある過去に従属した「前望の imp.」は当該過去より後の状況を示すことから、結局、cs.に近い意味となる。この「前望の imp.」は当該事態の結末についての情報は何も与えないが、これはその「未完了」的性質に因る。

条件節では imp.と cs.の交替はないが、Si se enteraban los demás, yo estaba perdidoのような反事実的な意味で用いられる《Si TENÍA, DABA》という公式はある⁷。この imp.の用法は、con gusto, de buena gana, yo en tu(su) lugar, 条件的解釈の現在分詞等の表現と共に、cs.と交替することができる。

上記の imp.の諸用法は非現実的な状況に言及するという意味において、法的(modales)なものである。「丁寧の imp.」「想像の imp.」「引用の imp.」「遊びの imp.」「前望の imp.」は「枠(ステージ)」という概念を適切に拡大する限りにおいて、imp.を copretérito とする伝統的分析の応用と見なすことができるが、それでも議論はある。imp.の法的用法を copretérito に同化させると、「指示的(よって、照応的)」形式という copretérito の基本概念を捻じ曲げることになるからである。

23.10 では、imp.を copretérito と分析する立場が imp. の先行詞に対する照応的繋がりを明確に定義していないと批判されるのを見たが、同様に、imp.はそのアスペクト的性質だけで説明でき copretérito という概念は必要なしとする立場も imp.文の「不完全性」⁸を十分に説明していないという批判にさらされている。この imp.の「不完全性」については様々な解釈があるが、いずれにしてもそれは文法的に解決しなければならない問題である。本書は、imp.の copretérito という特徴と「未完了」という特徴は互いに関係づけられるべきで、copretérito が示す照応的特徴は「未完了アスペクト」の結果だと考える。つまり、同じ「未完了」という特徴を共有する pres.が発話時によって同定されるのと同じく、imp.も何らかの時間的投錨を必要するということである。

23.12 未完了過去(CANTABA) (III) 動作様態の関与性。CANTÉ/CANTABA の対立

23.9 では、「完了的」ps.が非限界的述語によっても認可されるという逆説は、様々な外的限定形式を導入することによって解決されることを見た。同様に、「未完了」の imp.が限界的述語によって認可される逆説もそれらに欠けた継続性をもたらすような手段によって解決される。

「循環(反復)的解釈」は先にも見たように、pres.と完了過去とも共有する imp.のアスペクト価値であるが、限界的状況に特徴的なものである。Se {levantaba~levantó} temprano

⁷ p.1753, 23.11ñ, 1行目の CANTARA は文脈から **CANTABA** の間違いだと思われる。

⁸ imp.の「不完全性(naturaleza incompleta)」とは、例えば、El mayordomo bajaba las escaleras という単独の文は Cuando sonó el teléfono (En ese preciso momento), el mayordomo bajaba las escaleras に比べると不自然であること、すなわち、imp.文が出現するにはそれが照応すべき「枠(ステージ)」として働く過去の状況が必要となることを指す。

todas las mañanas における imp. と ps. の違いは、imp. は(終了していないという意味で)当該行為の開いた連続を示すに対し、ps. はその同じ連続が閉じていることを示す点にある。この imp. の「習慣(循環)的解釈」には言語外的な要素も関係し、almorzar, cenar, despertarse のような特定の時点やカレンダーの特定の期間に結び付けられた述語で起こりやすい。また、条件節も同じく反復的解釈を誘発しやすい。その他にも、todos/todas のような量化詞、siempre, nunca といった副詞、en(por) las mañanas, de joven, en sus buenos tiempos といった副詞句も imp. の「習慣(循環)的解釈」を導きやすい。これらの表現のうち、特に、imp. の「枠(ステージ)」となる時の副詞(句)は imp. が結び付けられる過去の状況を同定することになる。

imp. は pres. と同じく「未完了」の時制ではあるが相対的なものである。Don Julián tenía un bigote castaño という文は、don Julián は現在 bigote をしていない、今は違う色の bigote である、といった一時的属性の解釈の他に、tener un bigote castaño の時間的範囲について何も言及しないという解釈も持つ。この後者の解釈が非限界的述語に特有の「継続アスペクトの imp.」である。

<durante+量化名詞句>タイプの付加詞は「未完了アスペクト」とは相いれないが、「反復(習慣)解釈」の imp. は Dormía durante diez horas cada vez que se quedaba de guardia のように、この制約を受けない。なぜなら、この imp. はイベントの多回化を引き起こす頻度の副詞やその他の量化的表現に誘引されたものだからである。また、imp. は Si me tocara la lotería, me {iba~iría} de vacaciones durante un mes のように、cs. と交替可能な用法のほとんどで durante 句と共起する。

imp. には他に Esto último lo dijo el general deprisa cuando ya se iba のように限界的述語の差し迫った状況を示す「未遂の imp.」、同じく限界的述語を対象にし、特に、文学的あるいはジャーナリスティックな文体で用いられる「語り(中断)の imp.」と呼ばれる用法がある。「語りの imp.」は、特に、poco después, transcurridos unos meses のような後時性を示す構文で頻出するが、ps. と交替可能なことから「完了」と見なされることもある。

「進行の imp.」は先に見た「進行の pres.」と同じく進行中にある述語の一点に焦点をあてる。したがって、「進行の imp.」は、ある期間ではなく一点に焦点をあてるという点において「継続の imp.」と異なり、イベントが繰り返されないという点で「習慣(循環)の imp.」と異なり、起動的ではないという点で「未遂の imp.」とは異なる。しかしながら、「未遂の imp.」とは当該イベントの局面のひとつに焦点をあてるという点で一致する。

23.13 未完了過去 (IV) CANTÉ/CANTABA の対立のその他の面

非限界的述語において ps. が示す外的限界は、durante diez años, entre 1945 y 1956, hastalas nueve のように明示されることもあれば、個人の生涯が示す「存在限定」のように、暗黙のうちに了解されている場合もある。ps. は限界的述語とも共存するが、それは限界的述語が内的限定という特徴を持っているからである。

ps.も imp.も非限界的述語と共起するが、ps.はその外的限界に焦点をあてるのに対し、imp.は copretérito の特徴である「枠(ステージ)」を求めていく。したがって、Eugenio {tuvo~tenía} dos hijos cuando yo lo conocí では tenía, Eugenio {tuvo~tenía} dos hijos antes de casarse en segundas nupcias では tuvo がより自然である。一方、非限界的述語は内的限界を欠き、imp.はそのアスペクト的性質から外的限界とは相容れないので、{Tuvo~Tenía} bigote というオプションで tuvo が自然となるのは、{Tuvo~Tenía}bigote hasta los 60 años のような文脈においてのみである。

一方、Todo marchaba bien hasta que apareció...のように、hasta によって導かれた時の補語が習慣解釈を受けない imp.と共起することがある。この前置詞 hasta は前置された事態を無効にし、この事態とははっきりとコントラストを示す事態を導入するが、動詞句の補語ではなく文全体の修飾語と解釈されている。

ところで、ps.と imp.のどちらか一方としか共起できないという統語構造がある。以下、それらを示す。<soler+inf.>は imp.と pres.に特有の構文である。一方、ps.は<llevar+現在分詞>や副詞 habitualmente を拒否し、Hacía mucho que no {estaba~*estuvo} enfermo のように従属節事態がある期間に及ぶ事を示す hacer 構文も不自然になる。また、ps.は parecer 構文と共起するものの、間接補語を欠いた場合は不自然になる。tener aspecto, dar la impresión de algo といった述語も parecer 同様、間接補語がない場合には ps.は用いられない。さらに、por momentos, por días,といった副詞句は事態の漸進的局面を焦点化するので、専ら imp.と共起する。

法的動詞が示す時の情報は様々な読みを認める。ps.によって表された認識的助動詞における時の情報は法よりもスコープが小さく、Los dinosaurios pudieron extinguirse en el Cretácico は Es posible que los dinosaurios se extinguieran en el Cretácico と置き換えることはできるが、Fue posible que [...] のように「過去」に法よりも広いスコープを与える置換は拒絶する。しかし、能力、義務、その他の個人の特徴を表す助動詞では、Al final, pude hablar con él のように時制が法よりも広いスコープを獲得することができる。一方、El ladrón podía entrar por la ventana では、imp.が法助動詞よりも広いスコープを取り、その置換が Era posible que el ladrón entrara por la ventana となるとしか認識的解釈は生じない。この pudo と podía の認識的解釈の著しい相違、特に、podía の「未完了性」が文全体に及ぶという点は、過去のある「枠組み」において評価されねばならないという imp.の相対的性質に因るものである。なお、pudo と podía は、Pudo ganar millones pero aquí lo ves, casi en la ruina におけるように、pudo の方が podía よりも容易に反実仮想的解釈を導く点でも異なっている。

23.14 単純未来(CANTARÉ) 総合的未来と分析的未來

単純未來(以下、fut.)は発話時より後の状況を表す。したがって、絶対時制である。現在のロマンス語の fut.はラテン語の未來形が消失する際に haber の pres.と inf.が膠着し形成

されたものである。

未来性を表す分析(迂言)的未来 (voy a cantar, quiero cantar, pienso cantar 等) はヨーロッパのスペイン語よりもアメリカのスペイン語に特徴的である。また、総合的未来は統計的には分析的未來より頻度は低い、スペイン語のあらゆる変種にとって共通である。

総合的未来はいろいろな解釈を認めるが、それらには動詞の人称が関係する。例えば、依頼、命令、禁止と解釈される fut. は 2 人称で出現するのが普通であり、約束や取り決めと解釈される fut. は 1 人称で出現する。とはいえ、大方は文脈と状況が fut. の言語行為のタイプを決定する。一方、指針や指示では 3 人称主語の fut. が頻繁に用いられるが、この用法は pres. と共通したものである。また、Déjenos su informe y lo estudiaremos のように、<命令形+y+ fut.>という等位表現は条件節と解釈され Si nos deja su informe lo estudiaremos のような言い換えが可能である。しかし、Márchate en seguida o te atraparán のように接続詞が離接的な場合には、条件節は否定的に解釈される

fut. が直近の行為を導入するとき、その意味は pres., また、しばしば cs. にも近づき、{Tendrá~Tiene~Tendría} usted la amabilidad de levantarse un momento ? のような交替が可能になる。fut. と pres. は上記のような丁寧な依頼のほか、要求、請願においても確認されるが、fut. の方が pres. よりも丁寧さ、敬意、緩和の度合いが増す。

現在に関する話し手の何らかの推測を導入する fut. は「推論(認識的、見込み)の fut.」と呼ばれ、法的価値を持つ。この「推論の fut.」は非限界的述語の「状態」「活動」類述語に特有で、Estarán en la cafetería~Tal vez están en la cafetería のように、pres. の動詞と蓋然、疑いの副詞からなる言い換え、¿Qué costará?~¿Qué puede costar? のように、法的動詞を用いた言い換え、Supongo que.. のような推測等の態度を示す動詞を用いた言い換えが可能である。しかしながら、上記の言い換えは、それらの表現と「推論の fut.」がまったく同じ価値を持つことを意味しない⁹。

条件の接続詞 si は現代スペイン語では fut. を受け入れないが、エル・サルバドルその他の中米諸国の俗語では確認されている。また、No te dirá nada. ---Pues si no me dirá nada, no voy a hablar con él. のように、直前に発せられた文がそのまま再現されるような文脈では例外的に <si+ fut.> という構文が認められる。他方、口語の感嘆文に特徴的な <si+推論の fut.> は本来条件文ではないが、Buena la has hecho, hijo. Si serás tonto のように指示対象のネガティブな特徴を強調する。

分析的未來では<ir a+inf.>がもっともよく使われるが、この fut. は専ら口語で用いられ、アメリカのスペイン語では話し手の確信を示すと指摘されている。その他の分析的未來としては<querer+inf.>、<pensar+inf.>がある。

⁹ 原書では、例えば、¿*Qué hace Clara probablemente? のように pres. と蓋然の副詞からなる文は疑問文にはならないが、対応する fut. は¿Qué hará Clara? のように疑問文も可能である。また、逆に、接続詞 que に導かれた名詞従属節において「推論の fut.」が出現するのはまれであるが、pres. と蓋然の副詞が共起することは普通である、と指摘されている。

現代スペイン語では fut.は cuando とは共起しないが、これはその他のロマンス諸語また古スペイン語とは異なる点である。ただし、1.擬古主義または言語傍層現象、2.強調用法、3.同格用法、4.逆転用法、では例外的に cuando 節に fut.が出現する。

tú verás(sabrás)およびそのバリエーションは、como, cómo と共に期待(予想)を表したり、どのような決断を取るべきかの判断を聞き手に委ねていること、また、相手に対する「警告・脅威」を表す際に用いられる。一方、usted dirá, tú dirás は話し手が聞き手の話を傾聴する用意があることを示す。エクアドルの山脈地帯およびコロンビアのアンデス山脈では、おそらくケチュア語の翻訳借用により、Tomarás が ‘toma, tomá’のような命令形の代わりに用いられるが、その fut.は Harásme un favorcito のように代名詞に前置される。

23.15 単純条件 (CANTARÍA)

単純条件(condicional simple 以下, cs.)は直説法の時制か動詞の法かという伝統的論争がある。今日では、cs.は直説法を選択する統語環境で出現し、接続法を選択する統語環境では拒絶されることから、前者の見方が受け入れられることが多い。しかし、cs.が仮定的状況に従属した非事実的内容を表すという点は看過できない。例えば、En 2012 {cumplirá~cumpliría} 60 años の fut.は当該人物が生まれた年が 2012 年より 60 年を引いた年でであれば真となるが、cs.の場合には、当該人物がすでに亡くなっているといった当該状況の完遂を困難にする事情が含意される。また、以下に述べるように、cs.はその語形成から fut.と、また、その時制的相対性から imp.との類似性を見せる。

cs.と fut.との類似性には次のようなものがある。まず、cs.は条件文の条件節には出現しない。ただし、スペイン北部の口語スペイン語、アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイ、アンデス地域諸国、チリの Chiloé, Punta Arenas 地域、コロンビア南部の俗語は例外である。これらの地域では、目的節、影響・願望動詞の補文等でも cs.が接続法過去形(CANTARA)の代わりに出現することがある。また、fut.で見られたように、直前に発話された語を再現した「引用の解釈」の中に出現した <si+cs.> は間違いではない。同じく、Si estaría cansado que se durmió tomando el examen のような、結果的解釈の従属文に従えた感嘆文内の si と cs.組み合わせも間違いではないが、この si は条件的な意味を持たない。さらに、fut.と同じく cs.も、強調用法や同格用法といった例外を除き、cuando 節には出現しない。

一方、「推論の cs.」は「推論の fut.」に類似するが、現在に言及する fut.に対し過去に言及するという点で異なる。また、「推論の fut.」とは違い「推論の cs.」は<ir a+inf.>にまでは拡大されない。「推論の cs.」は No recuerdo cuánto me {costaría~pudo costar} esta cámara のような置換が可能だが、この cs.は ps.に法的動詞 poder の意味が加えられたものであり、cc.や「推論の fc.」にも近い。「推論の cs.」の中には十分に確認の取れていない情報を報道するために用いられる「噂の cs.」と呼ばれるものや、Convendría, por otra parte, conocer alguna explicación sobre [...]のように、何らかの提案を丁寧に導入する際

に用いられる「緩和の cs.」と呼ばれるものもあるが、これらはどれも「推論の cs.」のバリエーションと考えられる。

「丁寧(謙譲)の cs.」は「丁寧の imp.」に類似し、{Desearía~Deseaba~Deseo}hablar con el doctorのように両者は交替可能である。しかし、「丁寧の cs.」と pres.の交替は必ずしも可能なわけではなく、Me gustaría decir algoはMe gusta decir algoを意味しない。一方、imp.と cs.の交替はNos dijo que hoy no {venía~vendría} a trabajarのように回顧的な場合とYo en tu lugar no lo {aceptaba~acceptaría}のように非現実な場合に起こる。回顧的な文脈では、cs.は imp.と同じく ps.の代わりに用いられることもあるが、そのような cs.は「語りの cs.」と呼ばれ、文学等の文語の洗練されたレジスターで用いられる。一方、cs.が出現する非現実な文脈に必要な仮定的状況は、siに導かれた条件節、en tu casoのような条件節の代わりをする付加詞等いろいろあるが、そのような状況は必ずしも言語化されているわけではない。さらに cs.は、{Deberías~Debieras} prestar más atenciónのように、迂言形式中の poder, deber, quererと共に接続法過去(CANTARA)とも交替するが、これは条件節中では起こらない。

23.16 発話時から直接方向づけられていない複合時制：大過去(HABÍA CANTADO)、前過去(HUBE CANTADO)、複合未来(HABRÉ CANTADO)、複合条件(HABRÍA CANTADO)

すべての複合時制は「前時性」を表し、Belloの用語では接頭辞 ante-がつく。また、pc.を除き、直説法の複合時制は発話時とは異なる時点に投錨される。

大過去(pluscuamperfecto,以下 pcp.)は haber cantado の imp.と見なされてきた。この分析には問題あるものの、それに従えば、imp.の反復用法や法的用法が pcp.にも及んでいること、また、pcp.のアスペクト特徴は imp.の「同時性」ではなく「前時性」であることを理解することができる。

pcp.には、Disculpe usted. Me había parecido que la conocíaのような、pc.の「丁寧」用法がある。しかし、pcp.の「丁寧」用法の頻度は imp.のそれに比べれば極めて低い。pcp.には他に「想像の imp.」「遊びの imp.」に相当するものもある。一方、imp.が cs.と交替することがあるように、特に口語では、Si yo fuera tú, ya {había~habría} aceptadoのように pcp.は cc.と交替する。

pcp.に必要な過去の時を特定するのは必ずしも容易ではない。限界的述語に必要な参照点は瞬間的であるのが一般的であるが、それでも pcp.の正しい解釈は文脈と状況に依存する。特に、テキストの冒頭で pcp.を使用するには、imp.の場合と同じような仮定的場面(枠)が必要である。

pcp.と pc.の交替は Nunca me {había~he} sentido tan agasajadaのように、antes de ahora~hasta ahoraの交替が認められる限りにおいて可能である。pc.の代わりに ps.が用いられる地域では Nunca me lo {planteé~había planteado}のように pcp.と ps.の交替が起こる。なお、pcp.と ps.の中和はアメリカのスペイン語でより多く観察される。

23.8 では pc.のエビデンシャルな用法がアンデス山脈およびラ・プラタ川流域で様々なバリエーションを見せることを指摘したが、この地域では *Ya es tarde* の代わりに *Había sido tarde* のように pc.が pres.に取って代わるような用法が記録されている。同様に、エクアドルの Sierra では *Ayer, cuando la llamé por teléfono, había sido tarde y nadie me contestó* のようなエビデンシャルの imp.としての pc.も記録されている。また、ボリビアでは「噂の cs.」に類似した pc.のエビデンシャルの用法、さらにパラグアイの俗語では *había sido ya es tarde*(*ya es tarde había sido*)のように文の前あるいは後に置かれる副詞表現の pc.の用法も確認されている。

前過去(*pretérito anterior*, 以下 pa.)は *Algunos invitados se marcharon apenas hubo terminado la cena* のように、ある過去の状況からほんのわずかな時間差しかないもう一つの過去の状況を示す。pa.は口語ではほとんど出現せず、文語の洗練されたレジスターでたまに使用されるぐらいである。また、pa.の古い用法¹⁰は、特に、ヨーロッパのスペイン語の擬古典的な法律の文章に特有なものである。しかし、この例外を除けば、pa.の古い用法は現代語では消失し ps.がそれに取って代わっている。その結果、現代スペイン語の文語では、pa.は *apenas, después (de)que, luego que, tan pronto como* といった後時性を示す副詞表現(接続詞)に限界的動詞が後続するときにはしか使われない。なお、pa.は局面副詞の *todavía, ya* と共起することができないが、これは pa.が他の複合時制に比べより ps.に近いものであることを示したものである。

複合未来(*futuro compuesto*, 以下 fc.)と複合条件(*condicional compuesto*, 以下 cc.)は並行した時制である。fc.は Bello の用語では *antefuturo* だが、それは発話時より後の時点(*futuro*)より前(*ante*)の時を示すからで、一方、cc.は Bello の用語では *antepospretérito* となるが、それは過去(*pretérito*)より後(*pos*)の時点より前(*ante*)の時を示すからである。上記のように、fc.が出現するには発話時よりも後で、もうひとつの未来の時点よりも前に位置する中間点が必要となるため、この中間点を斥ける非限界的述語が fc.を取ることはまれである。

「推論の fc.」は、「推論の fut.」が pres.と法的要素に置換されたように、*Me habré equivocado~Probablemente me he equivocado(me equivoqué)* のごとく、pc.(ps.)と法的要素によって置換されうる。統計調査によれば、fc.は時制的に解釈されるよりも推論的(法的)解釈になることの方がずっと多い。そして、fc.が時制的に解釈される際、共起する時の付加詞は当該のイベントが定位する時点を示すこともあれば、発話時以降に定位される当該イベントよりも後の時点を示すこともある。また、fut.と同様に、fc.は条件節や *cuando* 節といった環境では出現できない。さらに、fc.の条件文帰結節内の解釈については、*Si tengo tiempo, {asistiré~*habré asistido} a la fiesta* のように、条件節が未来の状況に言及する場合には非文になると予想されるが、fc.の示す状況が条件節の状況と同時(直後)と

¹⁰ pa.の「古い用法」とは、*De todo conducho bien los ovo bastidos* (Cid)のように、後時性を示す接続詞を伴わず ps.の意味で出現した pa.の用法を指す。

解釈される限りにおいては, Si obtengo clemencia para él, habré realizado ya una segunda buena acción のように文法的になる¹¹.

cc.は上述のように antepospretérito と呼ばれるが, それは cs.が表す状況(pospretérito)よりも前(ante)に置かれた状況を示すからである. fc.の場合と同じく, cc.においても時制的解釈よりも法的な推論的解釈の方が多い. cc.は cs.と同じく「噂の用法」「丁寧用法」を持っているが,「丁寧用法」はアメリカのスペイン語で頻出する. また, cc.は cs.と同じく非現実の条件文の帰結節で使用される. さらに, cs.はほとんどの構文で接続法過去(HUBIERA CANTADO)と交替するが, アメリカのスペイン語では後者の方がより一般的であることが観察されている.

おわりに

以上, NGLE の第 23 章を要約した. その結果, 本章の要約を通して確認された NGLE で新たな特徴は次のとおりである.

- ・これまで議論の的となってきた時制の名称が, 形態的構造・時間的投錨(anclaje temporal)・アスペクト的特徴というスペイン語の時制を構成する 3 つの基準に従った体系的かつ明瞭なものに変更されている.
- ・「語彙アスペクト」においては, この分野の最新の研究成果がいかんなく発揮され,「語彙アスペクト」を決定する際の基準および「語彙アスペクト」が構成的なものであることが詳述されている.
- ・各時制の諸用法が地理的バリエーションも含み, 具体的な用例とともに詳しく提示されている.
- ・特に, pc.の記述には RAE の目指す「多元主義」がもっとも明瞭に現れており, スペイン語の pc.の多様性がかつてないほどの広さと詳細さで解説されている.
- ・従来議論の多かった imp.の機能については, これまで対立してきた未完了アスペクト説と copretérito 説の両方を紹介するだけでなく, 両説の長所と短所を指摘しながら, この 2 つの立場は相互排他的なのではなく, むしろ, 相互に関与するものであるという独自の視点を提示している.
- ・fut.と cs.はアスペクト的に「中立」とする新たな解釈が提示されている.

¹¹ p.1794, 23.16v,2 行目には Como *haber* expresa anterioridad とあるが, 議論の流れからすれば, “anterioridad”を表すのは助動詞 *haber* ではなく過去分詞の方ではないかと思われる.